

80

75

70

65

60

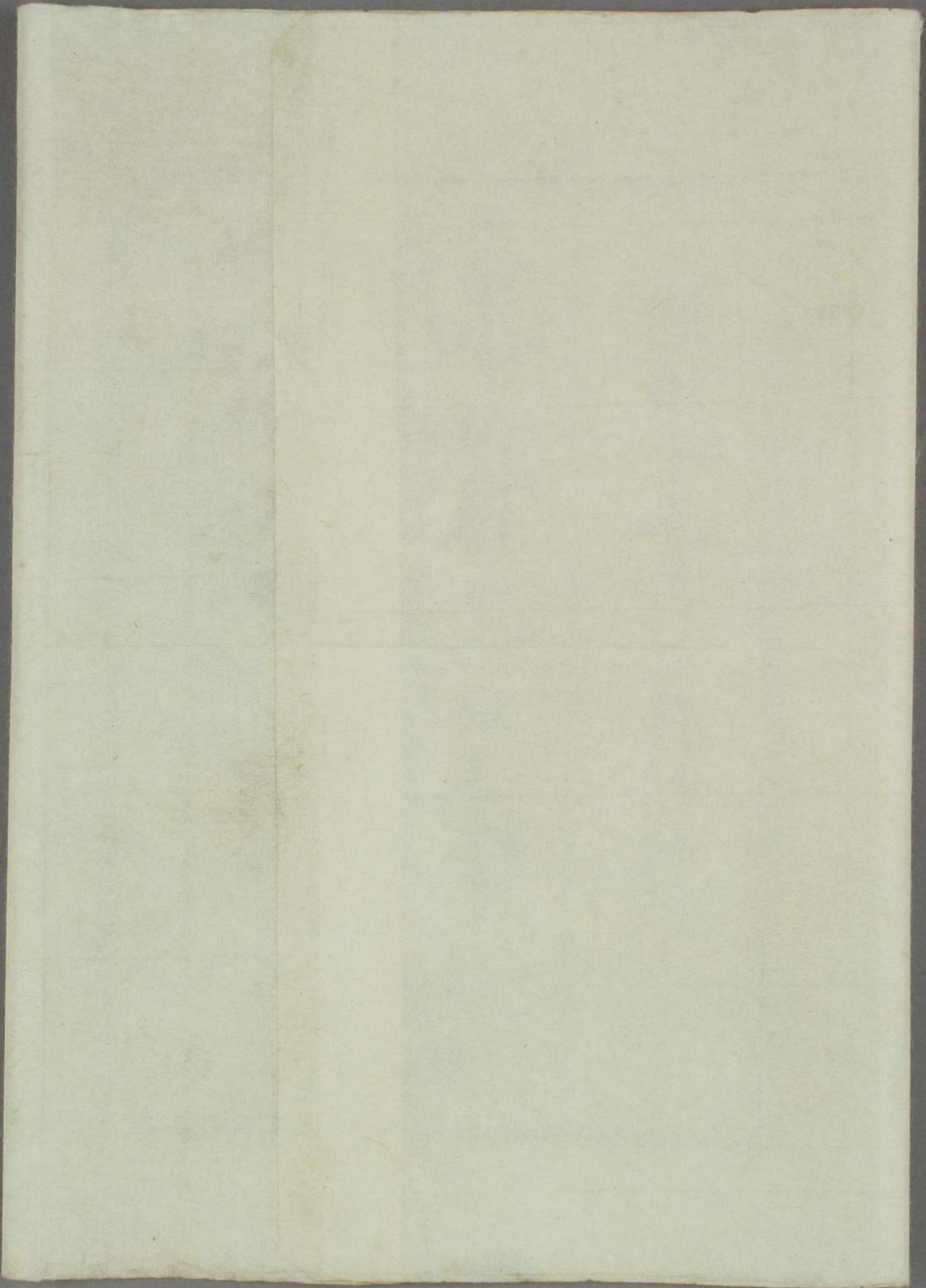
外山正一  
上田良吉全撰  
井上哲次郎

新體詩抄 初編

明治十五年七月刊行







80

75

70

65

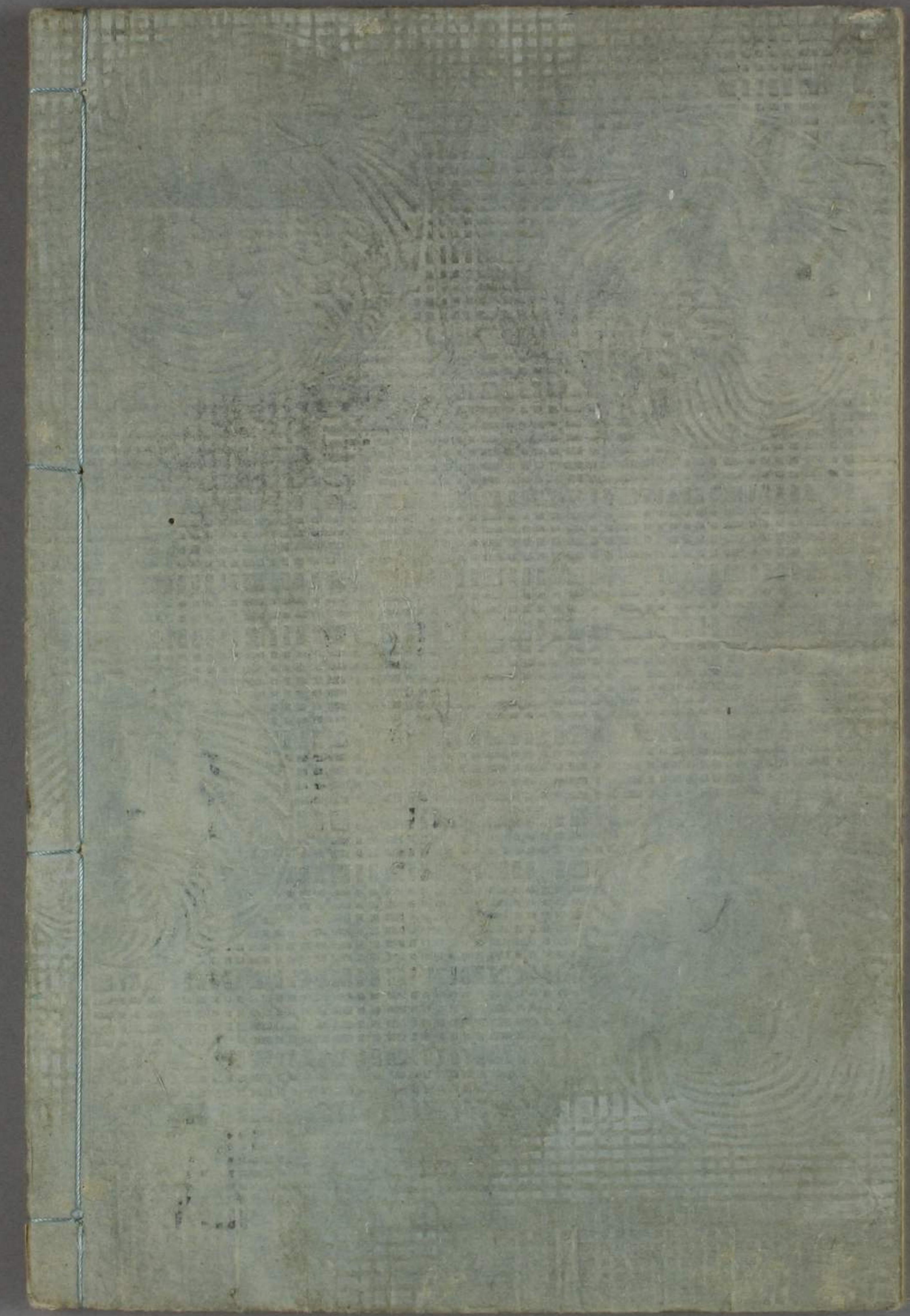
60

新體詩抄

初編

LICENSED PRODUCT  
3/Color Black  
White Magenta Red Yellow Green Cyan Blue







外山正一  
矢田部良吉全撰  
井上哲次郎

新體豆詩抄

初編

明治十五年七月刊行

新體詩抄序

程子曰。古人之詩。如今之歌曲。雖閭里童稚。皆習聞之。而知其說。故能興起。今雖老師宿儒。尙不能曉其義。况學者乎。是不得興於詩也。余讀此文。慨然而歎曰。今之歌曲。如古人之詩。而今人不知之。賤今之歌曲。而尙古人之詩。嗚呼亦惑矣。何不取今之歌曲乎。後讀傳記。見原益軒有謂曰。我邦只可以和歌言其志。述其情。不要作拙詩以招詬癡符之譖。余又曰。誠如益軒氏所言也。我邦之人。可學和歌。不可學詩。詩雖今人之詩。而比諸和歌。則爲難解矣。何不學和歌乎。後入大學。學泰西之詩。其短者。雖似我短歌。而其長者。至幾十卷。非我長歌之所能企及也。且夫泰西之詩。隨世而變。故今之詩。用今之語。周到精緻。使人翫讀不倦。於是乎又曰。古之和歌。不足取也。何不作新體之詩乎。既而又思。是大業也。非學和漢古今之詩歌。決不可能。乃復學和漢古今之詩歌。咀英嚼華。

將以作新體詩。而未知其成與否也。屬者、山仙士與尙今居士。陸續作新體詩以示余。余受而讀之。其文雖交俗語。而平平坦坦。易讀易解。乃歎曰。有是哉。雖閭里童稚。於習聞之。何難之有。且作此詩。以發舒情志。則不亦勝於作唐詩以招詒癡符之誚乎。乃與二君屢相往來。改格正調。所作不爲少。因撰其佳者。名曰新體詩抄。是爲第一編。世之作詩歌者。其或謂以爲鄙俗乎。雖然。自古新體詩之興。多出于偶然。而不必俟多方鍊磨之勞也。果然。則此書雖鄙俗。安知其不爲新體詩之始哉。

明治十五年五月七日

巽軒居士井上哲次郎撰

新體詩抄序  
世ニ及ニ大體ノ新體詩抄序  
舊傳之言。今文變曲。古人文雅。而個人不時。姑泊其味。今觀其而審識。而不識其趣。此學苦守。豈不吾與然。吾子曰。古人之精。唯今文能盡。無間理宜。惟舊聞之而戚其焉。

新體詩抄序  
人常ニ善惡是非ノ差別ナナスト雖モ一定不易ノ理アリテ然スルニ非ザルガ如シ其善ト爲シ惡ト爲ス所ハ其父祖ヨリ遺傳セル心性ト其處ル所ノ社會ヨリ受ケタル教育トニ由テ稍規準トナス可キモノノヲ心中ニ生シ之ニ依テ判別スルノミ儒道ノ專ラ行ハル、邦ニ於テハ孔子ノ言フ所ナリトシ「モルモン」教ノ專ラ行ハル、地ニ於テハスマス氏ノ言フ所ナリトス方今歐洲人ノ信仰スル耶穌教ハ嘗テ猶太國ノ邪教ナリキ方今我邦人ノ信仰スル佛教ハ嘗テ印度ヨリ放逐セラレシモノナリ方今世ニ行ハル、光線波動ノ說萬物化醇ノ論ノ如キハ昔人ノ非ト爲シ、所ナリ明治ノ時代トナリテ某氏ノ爲メニ初メテ楠公内藏之助ノ忠義ハ權助ノ忠義ニ比ス可キヲ知リ某氏ノ爲メニ初メテ壓

制ハ自由ノ因ナルヲ知レリ世界ノ廣キ開化ノ種々ナル  
が人肉ヲ啖ヒ老者ナ生ノマ、埋メテ是ト爲スノ國ナシト  
モ言フ可ラズ國ナ異ニシ時ヲ異ニシ教育ヲ異ニシ觀念ノ  
聯合ナ異ニスルモノトハ與ニ善惡是非ヲ語ル可ラズ故ニ

歌ヲ曰ク

世ノ中ハオノガ心ノスガタナリ善キモ惡キモ外ニナク

シテ

斯クハ述ルモノ、敢テ世道ノ衰頽ヲ憂ヒテ之ヲ挽回セントスルガ如キ大事ヲ圖ルニ非ズ唯頃者同志一二名ト相謀リ我邦人ノ從來平常ノ語ヲ用ヒテ詩歌ヲ作ルヲ少ナキヲ嘆シ西洋ノ風ニ模倣シテ一種新体ノ詩ヲ作り出セリ但シ今成ル所ハ西詩ノ譯ニ係ルモノ多シ乃ケ其數首ヲ集メテ一冊トナシ世ニ公ニス是レ我輩ノ稍心ニ嘉シトスル所ナ

レニ安ゾ知ラン世人ハ之ヲ奇怪千萬野鄙至極ノモノトナシテ唾棄ゼンフヲ然レニ上ニ言フガ如ク是非善惡ハ一定ノ理ナク時代ノ新古開化ノ先後各人ノ信ズル所ニ隨テ異なるモノナレバ我輩ノ詩モ亦今世ノ人ニ容レラレザルモ安ゾ知ラン後世ホーメルシーキスピールトマデニコソ至ラザレ或ハ大家ノ出ルアリテ其新流義ナルヲ善トシテ一層ノ工夫ヲ加ヘ更ニ人心ヲ感セシメ鬼神ヲ泣カシムルノ詩ヲ賦シ出スニ至ラザランフナ此編ヲ讀ム者須ク此ヲ諒シテ我輩ガ素志ノ苟且ナラザルヲ曉ルベシ敢テ卑見ヲ錄シテ以テ序言ニ代フト云爾

明治十五年四月

尙今居士矢田部良吉識

## 新體詩抄序

唐の横町の毛唐人ハタケヒトが云ふ「大凡物不得其平則鳴、艸木之無聲、風撓之鳴、水之無聲、風蕩之鳴」云々「人之於言也亦然、不得己而後言、其歌也有思、其哭也有懷、凡出乎口而爲聲者、其皆有弗平者乎」と我邦ニも長歌たの三十一文字ミツイチモトノシテの川柳たの支那流の詩だと、様々の鳴方ありて、月を見て鳴り、雪を見て鳴り、花を見て鳴り、別品を見て鳴り、矢鱈ヤマメふ鳴りちらそとも十分よ鳴り盡をこと能ハキ、何んとあれば、古來長歌を以て鳴れるものあきふあらねども、こゝ最と稀あることみて、事物よ感動せられたる時の鳴方ハ皆三十一文字や川柳や簡短かる唐詩と出掛け實よ手輕かる鳴方あればなり、蓋し其鳴方の斯く簡短かるを以て見れば、其内ふある思想

とても又極めて簡短あるものたるゝ疑なし、甚だ無禮ある  
申分かゝ知らねども三十一文字や川柳等の如き鳴方みて  
能く鳴り盡をとの出来る思想へ、線香烟花か流星位の思  
ふ過ぎるべし、少しく連續したる思想、内にありて、鳴らんと  
するときへ固より斯く簡短ある鳴方みて満足するものよ  
あらぞ又唐風の詩を作り稍長くと鳴るもの、近來世間ふ尠  
しとせざれども抑も詩と云ふものへ其意味も固より大切  
あれども、其音調の良否も、又甚だ大切なり、夫れ變則者流の  
漢學者の唐詩を作るや、固より平仄てふものありて其詩た  
る一通りへ、音律ふ叶ひたることへ、萬々疑ふしと雖も、芥子  
坊主をして、之を呼鳴らあめたらんふゝ果して心地よき音  
調のものかるか、將た破鍋を雷木よて叩くが如きものある  
や、未だ知るべからず、蓋し日本人ふ取りてへ支那流の詩  
へ、恰も瘡の手真似、若くハ操人形の手踊の如きものあり、瘡  
は生れぞして、瘡の真似をあら、人と生れて、人形の真似をそ  
るもの、又憫まさるべけんや、そこで我等へ連續したる思想  
内ふある譯よもあらず心地よき音調を以て能く鳴ること  
の出来るものふをあらねども、全く三十一文字や堅くるじ  
き唐詩の出来ざる悔しさよ、何か一つと腕組あたれど、やそ  
り古來の長歌流新体あらず、名を付けるハ付けたゞ、矢張自  
分免許の鼻高て、あたら西詩を惜げあく、譯も分りぬ文句以  
て、譯したものや、尙ほ拙あをのが、ものせる長文句、能く見れ  
ば、

人には新体と名こそ新ふ聞ゆれど、  
人にはやむり古体の大佛の法螺、  
法螺と知りつゝ古を、我よりあさん下心、笑止とこそ云ふ

べけれ、法螺ハ我より始まれる、ものふあらぬハまだしをぞ人のあさざること、てへ假令へ法螺でもあきぞかし、唯々人よ異あるハ人の鳴らんとする時ハ、志やれた雅言や唐國の、四角四面の字を以て、詩文の才を表ハにも、我等が組は至りてハ、新古雅俗の區別あく、和漢西洋をちやませて、人よ分るが専一と、人よ分かると自分極め、易く書くのが一つの能見識高き人たちハ、可咲しあものと笑ハゞ笑へ、諺云ふ、蓼食ふ虫を好き／＼なれば、多くの人の其中よハ、自分極の我等の美舉を贊成せる馬鹿あしとせば、安んぞ知りん我等のちんぶんかんの寢言とても遂よハ今日の唐詩の如く人よもてはやさる、ことあさを、穴賢、

明治十五年五月

八山仙士外山正一識

凡例

一均シク是レ志ヲ言フナリ、而シテ支那ニテハ之ヲ詩ト云ヒ、本邦ニテハ之ヲ歌ト云ヒ、未ダ歌ト詩トヲ總稱スルノ名アルヲ聞カズ、此書ニ載スル所ハ、詩ニアラス、歌ニアラス、而シテ之ヲ詩ト云フハ、泰西ノ「ボエトリ」ト云フ語即チ歌ト詩トヲ總稱スルノ名ニ當ツルノミ、古ヨリイハユル詩ニアラザルナリ、

一和歌ノ長キ者ハ、其体或ハ五七、或ハ七五ナリ、而シテ此書ニ載スル所モ亦七五ナリ、七五ハ七五ト雖モ、古ノ法則ニ拘ハル者ニアラス、且ツ夫レ此外種々ノ新体ヲ求メント欲ス、故ニ之ヲ新体ト稱スルナリ、

一此書中ノ詩歌皆句ト節トヲ分ナテ書キタルハ、西洋ノ詩集ノ例ニ倣ヘルナリ

一 詩歌ノ初メニ往々序言ヲ附スルハ嘗テ新聞雜誌ノ類ニ

掲ケタル者ニテ、其事頗ル詩學ニ關係アルヲ以テ復ダ之

ヲ此ニ掲ケ、敢テ其煩ヲ厭ハス、看官幸ニ之ヲ諒セヨ、

明治十五年五月

編者識

目次

ブルウムフールド氏兵士歸郷の詩(、山仙士)	一葉
カムペベル氏英國海軍の詩(尙今居士)	四葉
テニソン氏輕騎隊進撃ノ詩(、山仙士)	五葉
グレー氏墳上感懷の詩(尙今居士)	七葉
ロングフルロー氏人生の詩(、山仙士)	十三葉
玉の緒の歌(巽軒居士)	十五葉
テニソン氏船將の詩(尙今居士)	十七葉
拔刀隊の詩(、山仙士)	二十二葉
勸學の歌(尙今居士)	二十三葉
ナヤールス、キングスレー氏悲歌(、山仙士)	二十六葉
鎌倉の大佛ふ詣で、感あり(尙今居士)	二十八葉
高僧ウルゼーの詩(、山仙士)	

新體詩抄初編

- シャール、ドレアン氏春の詩(尙今居士)三十葉  
社会學の原理ふ題す(、山仙士)三十一葉  
ロングフェロー氏兒童の詩(尙今居士)三十四葉  
シェークスピール氏ヘンリー第四世中的一段  
(、山仙士)三十六葉  
シェークスピール氏ハムレット中的一段(尙今居士)三十八葉  
シェークスピール氏ハムレット中的一段(、山仙士)四十葉  
春夏秋冬の詩(尙今居士)四十一葉

外山正一 矢田部良吉全撰  
井上哲次郎

ブルヴァムフールド氏兵士歸郷の詩

(、山仙士)

涼しき風よ吹かれば、ありし昔の我父の  
椅子よもたれてあるさまへ實よ心地克くありよける  
その座を志めし腰掛の堅く作れる臂掛けよ  
よそおの昔荒くと刻みのこせる我名前  
猶ありくとみゆるあり柱よ掛し古時計  
元よかへりぬ其音色聞きて轟く我胸よ

斯く心中ふ彼是と  
眺ふあがめつくと  
苔の席を眺むれば  
其美さあてやろさり  
敷て樂むものありと  
思ひへ更よいやまさり  
年をも日をも打忘れ  
わづと斗ふ啼きよけり  
過ぎ越し方をさまく  
あゝ我あがら愚ましと  
厚しく又口惜しく  
軍の神をのゝ忘れり

物を思へる其間  
窓の限よ織あせる  
緑の色の青くと  
又と類あらなくふ  
あしたゆふべの手をさみよ  
推量をねばいとゞなほ  
前後も知らず立上り  
稍時ありて心付き  
再び椅子よつくと  
思ひつゝけて按せられ  
意を髪も逆立ちて  
名譽の淵ふ落ち入りて

満る思へ猶切よ  
忘れんとして忘られぞ  
後よ掛し古畧歴  
ひらくくと誘はれて  
嵐ふ逢ふて翻へる  
一枚つゝふ又下へ  
數も合せて二十年  
暮せる年の数取りぞ  
來たる一羽の知更鳥  
我をつらく不審顔  
はよかむ如く見へふけり  
鳴呼老ひたりや老ひふけり  
昔の友ふあらぬかと  
さりさく如く堪があし  
嗟難よ堪へぬ其時ふ  
忽ち寄せるそよ風ふ  
上るゝ是ぞ陣前よ  
下りて落るその紙の  
故郷をはあれ遠國ふ  
折しも家の入口へ  
人よ狎れたる鳥あれど  
怖づるが如く且つゝ又  
口よ云へぬどそのふりへ  
それふ居へせる武社へ  
尋ねる様よ見へよけり

實は傷敷き事づかし  
其有様を熟くと  
あら恐ろしやむでたらし  
賴み賴める剣こそ  
仇と思へばなはさらふ  
聲するのたをうちみれば  
すらうたをうちみれば  
此影ころへ稚子と  
やがて入り来る我父の  
我子の顔を一目見て  
我を抱きて老いの身の  
腰のが傍よいめる  
打届め老人の  
口を合へすもあまる愛  
笑ふ姿の可愛ゆらし  
いとゞ曇れる老の眼を  
云へば女へ近寄りて  
イスパニヤより歸國せる  
身の上はあし斯く長く  
それよ付きても兎よ角ふ  
浮世の中ふ今へまた

カムラベル氏英國海軍の詩

尙今居士

イギリス國の海岸を  
一千年の久しきの間  
戦争のみゝ嵐をも  
敵を受くともたゆみあく  
軍烈しくあらばあれ  
立ちくる海の浪間より  
汝を援けたまふべし  
其甲板へてがらの場  
大子ルソンやブレーキの  
軍烈しくあはれ  
嵐も強く吹のば吹け  
汝が祖先あらはれて  
蓋し祖先の軍艦の  
大海原の其墓場

四方海あるブリタニヤ  
山とたちくる波とても  
慣れて我家ふ異あらば  
船より放ち轟のし  
軍烈しくあらばあれ  
國の光とたてし旗  
危難も都て解け去りて  
其時汝つゝものゝいさほし譽て  
歌ふ唱ひて悦びて  
烈しき軍すみし時  
益光輝きて  
太平の日よをどるうん  
安樂限りあきるらん  
強き嵐のやみし時

左の詩ハ一千八百五十四年英佛の兩國土耳斯を援けて  
魯西亞と兵端を開き遂に高名なるクライミヤの戦争とな  
り此間數多の合戦此處彼處は在りたる中最有名なる  
ものハ同年六月廿五日バラクラバの戦争にて英國の輕  
騎隊六百騎が目よ餘る敵の大軍中へ乗り込み古今無双  
の手柄を顯はしたれども惜ひ哉衆寡素より敵し難く其  
大概ハ討死し或ハ擒よせられ無難よ歸陣したる者甚僅  
よて有きと當時英國よ有名なる詩人テニソン氏が其進  
撃の有様を吟咏したる者よして何國人よ限らず苟も英  
語を解ひるものを此詩を暗誦せざるなしといふ

テニソン氏輕騎隊進撃ノ詩

其一

一里半なり一里半並ひて進む一里半  
死地より乗り入る六百騎將へ掛けの令下に  
士卒たる身の身を以て譯を糾へ分ならば  
答をあはれも分ならばこれ命これよ従ひて  
死ぬるの外へあらざりん死地より乗り入る六百騎

## 其二

右を望めば大筒ぞ前も左りも又筒ぞ  
共に打出に砲聲火薬天より轟くいりつちの  
響の如く凄まじやの彈丸雨飛の間ふも  
猛り立てぞ進むなる死地よりころ入れ鰐の口  
勇んじ乗り入る六百騎

## 其三

拔けば玉ちるやいばをば平昔もろ共に振あけて

さりくと輝けり敵陣近く乗り掛け  
大砲方をあて切りに最と目冷しき働きぞ  
煙の中より飛込みて烈しく陣を破るあり  
太刀の早業見でとなり敵の軍勢あぢくと  
遂ふさゝふる事ならずむらくそつとむらくづれ  
馬の頭ぞ立直す以前よ進みし六百騎  
残るはいとやわづりなり

其四

右を望めば大筒ぞ左りも後も又筒ぞ  
共に打出す砲聲天より轟くいりつちぞ  
彈丸雨飛の其中より死地より出て乗り歸へに  
死地より出て乗り歸へに歸る元の一里半

## 其四

左りも後も又筒ぞ天より轟くいりつちぞ  
從横むどん切り靡く鰐の口より脱れ出で  
六百人の其中

残るへいと、わづりなり

其五

あゝ勇ましきものゝふのよよ香しき其譽  
手柄ハ永く傳へなんとる年あまた重りて腰ハ梓の弓とあり  
頭よ霜を戴きて六百人の豪傑が敵の陳へと乗り入れる  
るのふる事を語りあべ末代までも名ハ朽ちむ

我邦ニ於テハ西洋ノ詩歌ヲ翻譯スル人甚ダ少ナシ蓋シ  
其趣向ノ我詩歌ト同ジカラザルガ爲メナルベシ又適翻  
譯スル人アルモ之ヲ支那流ノ詩ニ模擬スルガ故ニ初學  
ノ輩ハ解スルヲ能ハス余之ヲ慨スル久シ以爲ク西洋人  
ハ其學術極メテ巧ニシテ精粗到ラザル所ナシ其詩歌ニ  
於テモ亦之ト均ク能ク景色ヲ模寫シ人情ヲ穿ケ讚賞ス  
可キモノ多シ且ツ其句法萬種ニシテ韻ヲ踏ムモノアリ  
踏マザルモノアリ緩漫ナルモノアリ疾急ナルモノアリ  
其語勢ノ變化殆ド捉摸ス可ラズ而シテ其言語ハ皆ナ平  
常用フル所ノモノヲ以テシ敢テ他國ノ語ヲ借ラズ又千  
年モ前ニ用ヒシ古語ヲ援カズ故ニ三尺ノ童子ト雖モ苟  
クモ其國語ヲ知ルモノハ詩歌ヲ解スルヲ得ベシ加之西  
洋人ハ短キ詩歌ヲ好マザルニハ非レドモ亦長篇ヲ尙ビ

尋常ノ日本書ノ如キ薄キ冊子ヲ以テスレバ一篇ニシテ  
十餘冊ニモ上ルモノ少ナシトセズ頃口學友、山仙士ト  
相謀リ吾人日常ノ語ヲ用ヒ少シク取捨シテ試ニ西詩ヲ  
譯出セリ余素ヨリ詞藻ニ乏シト雖モ既ニ譯シ得ル所數  
篇ニ至ルヲ以テ今其一ヲ舉ゲテ江湖諸彦ノ高覽ニ供ス  
幸ニ其詞藻ノ野鄙ナルヲ笑フナカレ

尙今居士識

グレー氏墳上感懷の詩

山々りほみいりあひの  
鐘ハありつゝ野の牛ハ  
徐よ歩み歸り行く  
耕へん人もうちつうれ  
やうやく去りて余ひとり  
たろがれ時よ残りけり

四方を望めば夕暮の  
唯この時は聞ゆる  
遠き牧場のねやよつく  
猶其外は常春藤しげき  
近よる人をほのじ見て  
訴へんとや月よ鳴くる  
塔よやどれるふくろふの  
我巣よ寇をあにものと  
いとあられよも聲にあり

かしこよハ榆又こゝよ  
其下かけようづだりく  
壙よ埋まれこの村の  
のきの燕もよれどりも  
木魂よ響く角笛も

あさぼらけよぞありねれば  
冥士の人の眠をば

のまびすしくへありつれど  
覺にことこそあうりけれ

死よたる人はかあさよ  
妻のよあべも誰が爲めぞ  
爺の歸りをよろこびて

身を暖むる爐火も  
愛るわらべがうたことよ  
小膝よそがることもあし

曾てこの世よ居し時ハ  
山もはたげも其くはよ  
繁れる森も其斧よ

麥も小麥も其鎌よ  
手荒き馬も其むちよ  
まきせて君が儘ありき

功名とても浮雲の  
この古人の世の益と

過るが如きものあれば  
ほねをりするも不運をも

わびしき妻子の暮しをも

笑ふべきあああらきうし

富貴門閥のみあらぞ  
浮世の榮利多けれど  
草葉の露もれぬかなり  
樂器の音を聞をとも  
ひつぎ肖像美を盡し  
ひとたび絶えし玉の緒と  
へつらふ人のほめ言を

みめうつくしさをとめこと  
いつか無常の風ふりば  
黄泉よ入るの外ぞあき  
墓場の上よ寺をたて  
頌歌の聲よ合ひある  
身の不徳とあ思ひそよ

人の尊敬多くと  
つかぎとむべき術ハあし  
長き眠の覺ねまド

考へみれば廢れたる世よすぐれたる量ありて詩文の才も多けれど

學びの海り廣けれど心の性ハ賢き内も世のほまれをバ聞かせじて

深き水底求むれば高き峯をバ尋ねれば千代の八千代の昔しより

わたる船路を知らざれば身ハ賤しくて貧あれば空しく鄙ぶ終りけり

議院の議士を服さしめ國の安危を身ふ委ね此等のわざへおしあべて恵みひ汲く及ばねど不徳もいとゞ少なしや民をあやめて利をあみだまことをかくはら言ふ

業のおとるもハムデンか國よ軍を擧れとを人のかばねやあるあらん人のおそしも外よ見る高き譽望を民よ得る古人何ぞあづからん又常々のふるまひふ人を殺して王となり夢よみまトさること

此古墳の古人も國を治むる徳を具しあらはれぞして失せける歟

且つ巧ある詩文もて富貴ふ媚る世のあらひ  
是へ都の弊あれど未だ此地よ及ぼさむ  
此處よ生れて此處よ死ふ都の春を知らされバ  
其身へ淨き蓮の花思ひへ清める秋の月  
實よ厭ふべき世の塵の心よ染みしことぞあき  
されど收めしあきがらの醜しとてもたび人の  
建し石碑へ今もありしるしの爲と側近く  
醜しとてもたび人の憐を争で慧かせらん  
碑面よえれる名よ年齢よ文へ拙く彫りさまへ  
記念の功へ有ぞかし又有がたき經文の  
文句を引きてえりたるれ人ふ無常を諭そ爲め  
蓋し此世よ生れ来て程あく死るその時ふ  
別れの惜しきこともあく浮世の花の榮をば  
心の外よ打捨てゝ去り行く人へあらるべし  
眼の光り止むときれいなれば書けど余とてを  
たましい体を去るときれいたく慕はん妻子ども  
たとひ焼くとも埋むとも戀もあるらん身のやから  
如何せしやと思ひやりいつか歸らぬ旅みたち  
偕又此よ古人の人の思ひへ消えへせど過ぎ行く後へ世の人のたづねることも有るあらん

しのぢん時ハ此さとの頭よ霜を重ねたる  
老人斯くぞ曰ふあらん我わ躋き彼れが朝早く  
昇はる旭あ見バやとて岡おか登のぼるを常よ見き

又彼處ある川はたのわだわよりある根の側わふ  
流る、水よ打た臨み

又彼處ある常葉木のかしら傾かしづけうべ組み

とトかぬ戀こゝろの口惜くちしさ

枝伸のび垂たる山毛櫟の木の身を横よたへて畫かずいこひ  
其常ときあさをかこちげん

木立の下よさまよひて知しる人あさの歎なげき

世のうさ掠くをかこちげん

さるよひと日ハ彼の人と絶ぜつて見むことあかりけり

慣なまれし岡よも樹陰ふゑいふも其翌あく朝あおり忽おれど

野よも森も川邊よも

身をば現あらわすことぞあき

又其次の朝ぼらけ屍お送しる歌きけばまさしく彼の爲めありき

君の字を知しる人なれば碑文を讀よみて識しりたまへ

土よ枕しこの下ふ身をかくしたる若わか人は富貴名利もまだ知らせ

學むびの道みちも暗くろけれどあはれ此世を打捨てあの世の人とありふけり

仁惠深き人あれば天も憫み報ひけり  
憂き人見れば涙ぐむ(外は詮をべあき故)  
ひとりの友のありしとよ外ふ望みはあるらん  
これより外は此人の善し惡し共ふあらず深く  
尋るとても詮へなしたましひ既ふ天よ歸し  
後の望みをいだきつゝ神ふまぢかく侍るあり

ジョン・フルロー氏人生の詩

、山仙士

るも靈魂の眠るのへ死ぬといふへきものぞかし  
人の一生夢ありとあられあふしうぬあふよ  
眠うや夢へ見るものぞ夢とおもへどさあらぞ  
人の一生夢ならぞ最とたしのある事ぞかし  
人の終の墓あくも墓ようづまるものあらぞ  
土より來り又土ふ歸ると云ふゝ肉体ぞ  
よりや靈魂の事あらぞ  
此世よ在りて樂むも又苦しむも固と人の

世はある趣意ふあらざらん  
日毎くよ怠らずぞ  
功を立てねばあらぬぞよ  
光陰寶は箭の如く  
心へ如何よ猛く共  
送葬大鼓打つ脚へ  
最ともあられふひゞくらん  
藝道最とも易うぢ  
墓かく進む葬禮の  
音止めされたる大鼓の音

此世の中へ戦争ぞ  
人は生れた甲斐もなく  
あゆむ羊や牛たるな  
功名手柄あるべきぞ  
其戰争の中ふ居て  
人ふ使ひれ追はれつゝ  
人よ劣りき憤發し  
未來へあてふそべのうむ  
過去へむりしよ過しお  
其勵を見る者へ

## 胸の心と天の神

豪傑輩の一生を  
生きて甲斐あさものあらぞ  
稀かる譽得るあらば  
永く傳へて残るらん  
其香しき名を聞かば  
艱苦辛苦の浪風ふ  
助け船さへあらぬ身を

熟ら思ひめぐらせば  
人よ勝れし手柄して  
名ハ香しく後の世ふ  
社会の海よ乗り出して  
吹き廻はされて破船して  
氣を取り直し憤發し

功名遂ぐる者あらん

されば人を怠たるな  
運命如何よつたなきも  
たゆまに止まじ自若とし  
勤め働くことをせよ

暫時も猶豫するあかれ  
心を落とさなかれ

功名手柄なしつゝも

余蚤ニ新體ノ詩ヲ作ラント欲セシト雖モ、其容易ノ業ナ  
ラザルヲ慮リ、先ツ和漢古今ノ詩歌文章ヲ學ビ、ソレヨリ  
漸次ニ新體ノ詩ヲ作ルノ路ヲ爲サントシケルニ、一日尙  
今居士ハムレットノ譯詩ヲ示サル、其文俗語ヲ交フト雖  
モ、反リテ古歌ヤ漢詩ノ解シガタキニ勝ル、因リテ余之ヲ  
歎賞シテ學藝雜誌第六號ニ載ス、次イテ、山仙士モ亦ハ  
ムレット并ニカーデナル、ウルシー等ノ作アリ、是ニ於テ  
余思フニ古今ヲ問ハズ、東西ヲ論セズ、凡ソ新體ノ詩ノ流  
行スルハ、大抵偶然ニ出ヅル者ニテ、必ズシモ百方鍊磨ノ  
勞ヲ俟タザルナリ、サレバ尙今居士、山仙士ノ作ル所モ  
新體ノ詩ノ始メナルヤモ知ルベカラズ、乃ナ自カラロン  
グフエロー氏ノ玉の緒の歌ヲ譯シ、二君ヲシテ新體ノ詩ヲ  
瓶造スルノ功ヲ専ラニセシメザラント欲ス、余ノ作ル所

略、二君ニ同ジ、但、二君ハ韻ヲ踏マズ余ハ試ニ韻ヲ踏ム、是レ其差ナリ、或ル人余ガ譯詩ヲ見テ、大ニ笑フ、蓋シ或ル人ノ如キハ文學ノ盛衰興廢スル所以ヲ知ラザル者ニテ、深ク尤ムルニ足ラズ、夫レ明治ノ歌ハ、明治ノ歌ナルベシ、古歌ナルベカラズ、日本ノ詩ハ日本ノ詩ナルベシ、漢詩ナルベカラズ、是レ新體ノ詩ノ作ル所以ナリ、若シ夫レ押韻ノ法、用語ノ格等ハ、次第ニ改良スペキノミ、一時ニ爲スペカラズ、看官幸ニ之ヲ諒察セヨ、

玉の緒の歌(一名人生の歌)

巽軒居士識

眠むる心ハ死ねるあり、見ゆる形ハおほろあり  
あすをも知らぬ我命、あはれはかあき夢ろうし

など、あはれふいふハ悪し

我命こそまことあれ、我命こそたしかなれ  
墓ハ終りの場所あらず、人の塵よて又散ると  
いふからだのうへのこと

人の願ハ喜

か

人の願ハ悲

う

業ハ久しく時ハ馳す、強き脚たも亦たえず  
鼓の如く擊ち續け、一日くみちりくある  
死出の旅をぞやすある

争ひ多き世の中あかりてまそく進むべし言あき啞とある勿れ

率かるゝ牛となる勿れ

此身を寄せて先鞭ふ

如何は未來の樂しきを共よ之をハ捨ておきて

如何ふ空しき過去あるをわれを忘れモ神を知り

はたらくべきハ今日さうり

すぐれたる人世は多し  
勉め勵まバ斯くあらん  
長く残さん此名をば

われとても人相同ト  
ゆめ怠らぞ勉めあバ

海より荒き世の中ふ  
獨漂ふ我友ハ  
我名を聞きて進まかん  
さそれば人の氣を張りて  
如何ある運も事とせぞ  
樂あるぞはたらけよ

舟失ひて波の間ふ  
我名を聞きて勇まかん  
事業バうりふ心して  
高きよ至れ馳せゆけよ

暴威を以て下を駆け人ハ此世の鬼あるぞ  
天地も容れぬ罪あるよ其過ちの深きこと  
阿鼻の地獄も及ばず若しや今しも壓制を  
嗜まんものゝあるからべ  
其身を深くいましめよ  
曾て勇々しき武士の  
將たる船の乗組ハ  
自由の空氣吸ひあれし  
英吉利國の人あれば  
勇のみあらば信あれど  
其船將の壓抑を  
將が性質猛くして  
無きのみあらば針ほど  
免をこと無し  
斯て世ふ  
慈愛の心露はざも  
深く怨みて措うせとよ  
罪も嚴しく糺し問ひ  
將が暴威へいやつのり

船入どその心中ふ  
消るひまかくあらくふ  
人をも身をも、凶共よ  
船將常ふ望むらく  
わが船の名を轟るし  
千萬人よ呼べれんと  
湊よ過り岡ふ沿ひ  
北ふ南よ何處とあく  
大海原の眞中ふて  
帆を打揚げて來る船  
軍の船よまぎれあき  
喜び外ふあらへれて  
船人ども、銘々の  
船入どその心中ふ  
消るひまかくあらくふ  
人をも身をも、凶共よ  
船將常ふ望むらく  
わが船の名を轟るし  
千萬人よ呼べれんと  
湊よ過り岡ふ沿ひ  
北ふ南よ何處とあく  
大海原の眞中ふて  
帆を打揚げて來る船  
軍の船よまぎれあき  
喜び外ふあらへれて  
船人ども、銘々の

眼の中よおのづから  
喜ぶ色の見えたりし  
ものども船を追ふべしと  
風よまかせて我船も  
敵よまちかく進みゆく  
常ふ怨みし大將を  
おふ乗組一同は  
大砲はなつものへあし  
さられぞ敵の大砲は  
實よいかつちの落るでと  
天地も破裂をるはうり  
帆架もわれてこあ微塵  
天雨りあられか怖ろしや  
甲板裂けて容あく  
銃丸繁くふりきたり  
甲板のみか帆柱も  
生きとし生けるもの共へ  
甲板の右ふ左ようち倒れし  
人の脳やう血汐やら  
をの言ふこともりなれば

見合は姿凄まじく血刃の中よ玉の緒の  
絶えんとしつゝ船將を見りへる眼おのづから  
嘲り笑ふ氣色あり賴みし人もことどく將の功名立てんとて  
われと賣りしづ口惜き我を嘲りよらみつゝ  
辱と恚のせりあひふ心のうちも堪へられぬ  
歯りみをあして叫べども顔色青く赤くあり  
かばねの上ふ倒れけり終よ痛手の疵おひて  
實よ怖るべし惡むべし鳴呼壓制よ嗚呼暴威  
失ひしこそはかなけれ數多の勇士いたづらふ  
經ぬとれいへど船將や其のち多く年月を  
水屑とおりく海底ふ今も沈みて残るらん  
さりとも見えぬ波の上ふ浮べる鷗二三羽

西洋にてハ戰の時慷慨激烈ある歌を謡ひて士氣を勵ますとあり即ち佛人の革命の時「マルセイエーズ」と云へる最と激烈かる歌を謡ひて進撃し普佛戰爭の時普人の「ウオツナメン、オン、ゼ、ライ」<sup>ト</sup>云へる歌を謡ひて愛國心を勵ませし如き皆此類あり左の拔刀隊の詩ハ即ち此例は徴ひたるものなり

拔刀隊

、山仙士

我ハ官軍我敵ハ天地容れざる朝敵ぞ  
敵の大將たる者ハ古今無雙の英雄で  
之より從ふ兵つまハ共ふ慄悍決死の士  
鬼神よ恥ぬ勇あるも天の許さぬ叛逆と  
起レバ者ハ昔より榮えし例あらざるぞ  
敵の七ふる夫迄ハ進めや進め諸共ふ  
玉ちる劍抜き連れて死ぬる覺悟で進むべし  
皇國の風と武士の其身を護る靈の  
維新このかた廢れたる又世よ出づる身の譽  
刃の下よ死ぬべきぞ死ぬべき時ハ今あるが  
玉ちる劍抜き連れて敵の亡ぶる夫迄ハ進めや進め諸共ふ  
前を望めば劍あり劍の山よ登らんハ未來の事と聞きつるふ

此世よ於てまのあたを  
我身のあせる罪業を  
賊を征伐するが爲  
敵の亡ぶる夫迄へ  
玉ちる劍抜き連れて  
劍の光ひらめく  
四方ふ打出そ砲聲  
敵の刃ふ伏そ者や  
絶えて墓なく失せる身の  
其血ハ流れ川をなす  
敵の亡ぶる夫迄へ  
玉ちる劍抜き連れて  
劍の山よ登るのを  
滅そ爲よあらぞして  
劍の山もなんのその  
進めや進め諸共  
死ぬる覺悟で進むべし  
雲間よ見ゆる稻妻か  
天よ轟く雷か  
丸よ碎けて玉の緒の  
屍ハ積みて山をあし  
死地よ入るのも君が爲  
進めや進め諸共  
死ぬる覺悟で進むべし

彈九雨飛の間よも  
進む我身ハ野嵐ふ  
墓かき最後とぐるとも  
死て甲斐あるものあらば  
敵の亡ぶる夫迄へ  
王ちる劍抜き連れて  
我今茲よ死ん身ハ  
捨つべきもの命なり  
忠義の爲よ捨る身の  
永く傳へて殘るうん  
義もなき犬と云へる、な  
我今茲よ死ん身ハ  
君の爲あり國の爲  
假令ひ屍ハ朽ちぬとも  
武士と生れた甲斐もあく  
卑法者とあそしられそ

敵の亡ぶる夫迄へ進めや進め諸共ふ  
玉ちる劍抜き連れて死ぬる覺悟で進むべし

勸學の歌

尚今居士

昔レ唐土の朱文公よ博學の大人あがら  
わが學問をすゝめんと少年易老の詩を作り  
國の東西世の古今人の高卑を問へせしと  
學の道は就くものへいゝ才能ありとても  
一生涯へ春の夜の夢の如しと嘆きけり  
同レ多少の感慨を起さぬことのあるべしや  
わ春の初花秋の月夏のみぞり葉冬の雪  
渾て此世の物事み心をとむる時あゞバ  
が學藝を省みて過る月日を思ふべし

池のみぎへの春草のみトかき夢も覺ぬま  
軒端よ茂るきりの葉へ吹く秋風にさそれて  
此年も半ば過ぬるとふみ讀む人へあらぞや

年の月日ハ長ければ難波入江の村あしの  
ひとよの如く思はれてわが身の上のはづくしさ  
螢や雪の光りふみハ讀めども業あらぞ

昔の人の學問へ唯一をぢは道あれど  
あは賢人の嘆きあを今ハ學術多端ふて  
枝よ小枝土ふ末葉までいりべ凡夫の能をべき  
され云ふものゝ諺ふ山のはトめハ一塊土

海のはドめハひとしづくいかふ急けど詮ハあし  
心をこめていつまでも怠らぬこそようりけれ  
たとひ多くよわたらぬを唯一藝を修めかば  
身の爲とある多りうん蜘蛛よ藝あり網をはり  
蜂ふ能あり蜜つくる何とて蟲よ及ばざる  
勉め勉めよたゆみあく進み進めよよどみなく  
難き事とて厭ふなよ學の海ふ舟路あり  
教の山よおをさあり文夫何かハ怯るべき

チャーレス・キングスレー氏悲歌

、山仙士

無常を告ぐる人相の鐘の音をるたそがれふ  
三人の漁夫の帆を上げて入る日を指し西の海よ  
走りに船の進めども妻子の爲よ引かさる、  
心の中へ皆同ト父の出船眺めつゝ  
おさよ向ひて彳める童子へ外よ餘念なし  
まうけハ薄く子澤山雨の降る日も風の夜を  
洲よ打掛くる浪音のかせがよやあらぬ男の身  
かせがよやあらぬ男の身の最とすさま引き其時も  
鐘もやのかふ聞ゆれハ袖のひぬのハ女子の身

三人の漁夫と妻三人日も西山よ入相の共よ籠りし燈臺の

火を挑んと立寄りてつまめる心の夫思ひ  
窓の戸開けて眺むれば驟雨やう暴風やら  
空打過ぐるむう雲ハ色黒くと物をでし  
暴風ハ如何よ吹けばとて水のさハ如何ふ増せばとて  
洲よ打掛くる浪音ハ如何程をおく聞けばとて  
のせがよやあらぬ男の身袖のひぬのハ女子の身  
朝日かゝやく砂礫ふ潮引き去りて其跡ふ  
残るハ三つの屍ぞ三人の漁夫の妻三人  
歸らぬ旅よ門出して歸らぬ夫のなきがりふ  
髪振り亂し取をがり消る斗ふ啼き入て  
目もあてられぬ風情あり袖のひぬのハ女子の身  
袖のひぬのハ女子の身一日も早く世を去れバ

一日も早く樂をせん 尻の跡の砂礫か  
寄せ来る浪のくだけつゝ、鳴りたきや鳴れよゑ、儘よ

西洋諸邦ハ勿論凡ソ地球上ノ人民其平常用フル所ノ言  
語ヲ以テ詩歌ヲ作ルヤ皆心ニ感スル所ヲ直ニ表ハスニ  
アラザルナシ我日本ニ於テハ往古ハ此ノ如クナリト雖  
モ方今ノ學者ハ詩ヲ賦スレバ漢語ヲ用ヒ歌ヲ作レハ古  
語ヲ援キ平常ノ言語ハ鄙ト爲シ俗ト稱シテ之ヲ採ラズ  
是レ豈謬見ト爲サルヲ得ンヤ  
夫レ我邦人ノ漢學ヲ修ムルヤ殆ト皆ナ所謂變則ナルモ  
ノニシテ漢土ノ本音ヲ以テ其文ヲ讀下スルモノ甚少ナ  
リ然シテ韻書作例等ニ因テ平仄韻字ヲ學知スルモノ之ヲ  
用ヒテ詩ヲ作ルニ當テハ既ニ本音ヲ發スルニ非ザレバ  
到底室内ニ游泳ヲ試ムルガ如クニシテ隔靴ノ憾ナキ能  
ハズ何トナレバ凡ソ詩歌ハ意義ノ優美奇巧ナルハ素ヨ  
リ望ム所ナレモ音調ノ宜シキヲ得ルフ亦極メテ肝要ナ

レバナリ而シテ音調ナルモノハ自國ノ語又ハ他國ノ語ナレバ其音聲ヲ曉熟スルニ非ザレバ其眞趣ヲ覩味スル能ハザルヤ明ケシタトヘハ變則流ノ洋學書生ガ辭書ニ據リ作例ニ從テ音聲ノ強弱ヲ學ビ詩ヲ賦スガ如シ誰カ其迂ヲ笑ハザラン又古言雅言ヲ以テ長歌短歌ヲ作り並フルモ吾人常ニ用ヒザル所ナレバ稍外國語ニ類スルガ故ニ之ヲ以テ精密ニ我衷情ヲ擗ベ我思想ヲ掞スコト或ハ難カラシ

果シテ然ラバ余以爲ク宜ク平常ノ語ヲ少シク折衷シ以テ稍新体ノ詩歌ヲ作り充分ニ吾人ノ心ニ感スル所ヲ吐露スペキナリ然レモ之ヲ言フモ爲サレバ人或ハ目シテ妄誕漫言ノ徒ト爲サン故ニ余謗劣ヲ顧ズ頃者試ニ西洋ノ詩數首ヲ譯シ既ニ其一二ヲ新聞雜誌ニ載セシワ

リ今復此新紙ノ餘白ヲ借テ拙作二首ヲ掲ゲ江湖諸彦ノ一粲ニ供ス其一ハ自作ニ係リ(但シ始ノ一節ハ大佛財法日課勸進之序ヲ取捨シテ作レルナリ)其一ハ西詩ノ譯ニ係ル余素ヨリ文事ニ疏ク詞藻ニ精シカラス江湖諸彦ノ幸ニ我微意ヲ諒察アランヲ乞フ

尙今居士識

鎌倉の大佛ふ詣で、感あり

今をさることぞふれハ六百年の其むかし  
建長のころ鎌倉ふ  
總相好いと、圓満し  
何れの地よも比類あし  
建長のころ鎌倉ふ  
青銅の大佛ハ  
稻多野局が建られし  
御身のたけハ五丈よて  
見者無厭の尊容ハ  
さるよ明應四年と

由井のつあみの難ふよぞ  
紫磨金仙も雨よ濡れ  
殆ど此よ四百年

殿破壞の其後の  
風ふ暴されたまふこと  
こゝれ人よ聞くところ  
余もこのころ鎌倉の  
杖を引きつゝ大佛ふ  
しかと尊顔見上れば  
淨き如來の御心へ  
涅槃てふ語の思へれて  
しバシの間胸の雲  
真如の月の圓かある  
見あるが如き心地せり  
古跡尋ねてをちこちと  
詣び、心ねちつけて  
はちすの花もおよひあき  
外よ見へれ何となく  
凡夫不覺の余とくも  
霽れて無明の夢へ醒め  
影を見たるよあらねども

夫れ物事のありあち  
昔シ羅馬の帝國へ  
起りしものよあらむるシ  
家康ひととぞ徳ありと  
時勢人情やうやくふ  
鎌倉山の大佛も  
千百年を過ぎし後  
精神こめく手を合せ  
わざ後生とて祈りしも  
生れし人の然へせを  
稻多野夫人の時代よ  
精神こめく手を合せ  
鑄もの、術も具へりて  
千百年を過ぎし後  
精神こめく手を合せ  
わざ後生とて祈りしも  
生れし人の然へせを  
此大佛ふ打向ひ  
天太太平安穩と  
今明治の聖代ふ

昔の事を思ひやり  
業をほむるの外へあらし  
秋の空とも劣るまど

昔の人の是といひし  
今日の眞まこといあはの偽うそ  
非理邪道ひりやうどうとやあるならん  
規律きりつよりて進化しんかにと  
聰と心じんよ認にんめたる

嗚呼盛んある大佛よ  
からくれあるのをみぢ葉と  
人の譽むるよ異あらば

事も今ぞハ非ひとぞかる  
あすの教きょうハあさつゝの  
天地萬物一定の  
學者がくしゃハ謂いへど是ぜを之れ  
人ひとハ果こなしてありるうん

六百年もたつた川  
流ながる、水みずを年々  
尊体此處しそくは在まね間まなハ

如何いかよ時勢じせいの變かわるとも  
歎賞たんしようせざることあけん

年々人の尋たずね來くわて

其鑄工きじゅうこうの巧たくみある  
かへればうへる時勢かな  
秋の空とも劣るまど

此篇ハ高僧ウルゼー初め王の寵愛を得て大權を握  
り威を海内ふ振ひ其富王室よ劣らざるよ至りしも  
忽ち王の意よ戻り官職を奪へれ所有を沒收せられ  
たる時世運の定よりあきを嘆息れる所よして頗る  
有名の作あり、

、山仙士

あさらばさらばいささらば 再び會へぬ暇乞ひ  
榮譽よ永く別るべし 人の習へ皆都て  
利運の端の芽出しあば 位よ位重ありて  
愚か脚よ思ふ様 天よも登る龍もありと  
冬やゝ深く置く霜の 運命強く願かあひ  
根までを枯らし霜枯よ 八重咲きよほふ花盛り  
見るも慇れあ有様ハ 我が今日の身の上う  
永の年月心あく 運極へよりて身の墮落  
浮袋よてうかくと 游ぐ童子よ異あらま  
丈の立たざる淵よ入り 飽まで強き我が意地を  
こらへをふせき張り裂けて 労れへてたる精神よ  
忠を盡して年寄れる 其の甲斐もあく今へそや  
身の零落よ涙川 水屑とこそ成るべけれ  
今廣き世界の其内で 忌むべき物へあらまかし  
此世を渡る男ほど 初めて悟る所あり  
ふ所へ其笑顔 慈むべき物へ無きづかじ  
恐るゝ所へ其不興

彼と是との氣がねじて  
軍はるより尙ほ多く  
遂よ零落はる時へ

憂さ恐怖さの數々へ  
女子の機嫌取るゝ増は  
天より落るルシファあり

再び浮ぶ潮へあらぞ

シャル・ドレアン氏春の詩

尙今居士

春の景色の、どけきを  
いかで好みぬ人あらん  
冬の物事さびしさを  
春の心のをのづから  
とけて樂み限りかし  
雪もみぞゑもふる雨を  
人をあやましことづあき  
のどけき春の来る時へ

北風強く吹く冬の  
野邊よ深雪木につら  
雨もこほりていと寒く  
障子ふにまを建廻へ  
爐火近く團居して  
ねぐらの鳥よことあらを  
されど嵐も雪も歇む  
のどけき春の来る時へ

疊りがちある冬の空  
日影もうにく画くらし

さきを春ともなりぬれば  
光りのぞけき天を見る  
跡も殘らず消えうせぬ

喜ばしくも雲られて  
いぶせく降りし雪霜の  
のぞけき春の来る時

社會學の原理 ふ題す

、山仙士

宇宙の事へ彼此の  
規律の無きへあらぬかし  
微かふ見ゆる星とても  
云へる力のある故ぞ  
又定まれる法ありて  
且つ天体の歴廻れる  
必定まりあるものぞ  
地震の如く亂暴ふ  
一ふ定まれる法へあり  
其組織より動作まで  
さきを春ともなりぬれば  
光りのぞけき天を見る  
跡も殘らず消えうせぬ

別を論ぜぞ諸共ふ  
天ふ懸れる日月や  
動くへ共ふ引力と  
其引力の働く  
猥りふ引けるものあらむ  
行道とても同トと  
又雨風や雷や  
外面へ見ゆるものとても  
野山ふ生ふる草木や  
空翔けりゆく鳥類も  
都て規律のあるものぞ

又萬物ハ皆共ふ  
あらざる物ハあきぞかし  
別を論ぜば諸共ふ  
遺傳の法で子よ傳へ  
適せぬものハ衰へて  
桔梗かるかや女郎花  
牡丹ふ縁の唐獅や  
木の間轉る鶯や  
雲居よ名のる杜鵑  
友を慕ひて奥山よ  
譯も分らで貝の音よ  
羊よ近き猿ハまた  
靈とも云へる人とても  
深き由來と變遷の  
鳥けだものや草木の  
親ふ備へる性質ハ  
適ほるものハ榮ゑゆき  
今の世界よ在るものハ  
梅や櫻や萩牡丹  
菜の葉よ止まる蝶てふや  
門邊よあさる知更鳥や  
同じ友をば呼子鳥  
紅葉ふみわけ啼く鹿や  
追はれてあゆむ牛羊  
愚もとよ萬物の  
今之體も腦力も

元を質せを一樣よ  
積みかさられる結果ぞと  
見極めたるハこれぞこれ  
優れも劣らぬ脳力の  
化醇の法で進むのハ  
動物而已ふあらぞして  
活動死物夫而己か  
區別も更ふかかりしを  
感するも尙あまりあり  
思想智識の發達も  
社會の事も皆都て  
既ふものせる哲學の  
原理の論ぞ之ふ次ぐ  
一代増ふ少しづ  
今古無双の濶眼ビ  
アリストートルニウトン  
ダルワキン氏の發明  
同ト道理を擴張シ  
まのあたり見る草木や  
凡ろありとしあるものハ  
眞理極めし其知識  
言語宗旨の改良も  
同一理合のものあれバ  
三五

生物學の原理やら心理の學の原理を  
士臺とおして今更ふ書ふものさる、最中ぞ  
それを社會といへ何ものをぞ其結構ふ  
種族と親と夫其子等の男女の申の交際や  
取扱の異同や少違ひの起る源因や  
其變遷の源因や智識美術や道徳の  
遡り變りて化醇をる論述おして三卷の

最とも目出度き美舉ふこそ  
讀ある者へ誰ありて實ふ珍敷しき良書あり  
何うら何とせへをやく走り書きやらうらじやべり  
天下の事へ一と飲みと人をあやまる罪とげの  
新聞記者や演説家月日の事や星の事  
夫等の事へさて置きて疊一枚させばとて  
長年の年月年季入れ出来る事ふあらさるふ

社會の學の原理をバ此書ふ載せて説かる、れ  
其發達ハ如何なるぞ社會の種類如何あるや  
利害の異同如何あるや種々政府の違ひや  
女子ふ子供の有様や僧侶社會の有様や  
儀式工業國言葉時と場所との異同  
其有様を詳細ふ長き文ふぞせらるべき

既ふ出てたる一卷を此書を褒めぬ者ぞあき  
社會の事ふ手を出して責任重き役入や  
舌も廻へらぬくせふして法螺吹き立て、利口ある  
此書を讀みて思慮あさば少しも減りもほるからん  
凡て天下の事業の足袋を一足縫へばとて寐る眼も寐をふ習へねば  
獨り社會の事計り

年季を入らぞ學問を  
新聞記者や役人と成るハ最と最と易けれど  
か様あ者多けれど  
尙ほ恐れしき虛無黨の  
揉めふ揉めたる其上句  
秩序も建たを自由あく  
再び浪風静まりて  
百年足らず掛らん  
有様見ても知れたと  
妄ふ手出しなる勿れ  
廣き世界の其中ふ  
盲目同士の戦ふ  
覗ひきまうぬ棒打の  
革命以後の佛蘭西の  
ころこふ心が付きたらば  
恐るべきもの多けれど  
越したるものハあらぬから  
仲間入りこそあやふけれ

今の世界ハ旋風  
烈しき中へつい一寸  
足も据へらぞ暝眩さ  
ぐるくと廻はされて  
上句のへてハ空中へ  
初て悟る其時ハ  
後悔先き立ぬあり  
其吹く中へ過ちて  
上手と云ふべけれ  
輿論を誘ふ人たちハ  
能く慎みて輕卒よ  
勵のぬやう願へしや

烈しく旋る時あるぞ  
絡き込まれたら運の盡  
頭へいとゞぐら付きて  
をき間もあらず廻はされて  
絡き上げられて落され  
颶風烈しく吹く時  
船を入れぬが楫取の  
政府の楫を取る者や  
社會學をバ勉強し

ロングフェロー氏兒童の詩

尙今居士

三一

來れ もうべかたひよ  
花ふ 戯れ 啼く 鳥も 汝<sup>おの</sup>が 清きこゝろより  
何如ある事を告るやを 我耳近くさゝやけよ  
思慮をめぐらし智を竭し 我等が成せるわざとても  
我等が書けるふみとても 汝<sup>おの</sup>様のうむゆさよ  
汝<sup>おの</sup>が 面<sup>おもて</sup>の 樂しそよ 比ぶることのあるべきや  
人の賞そる詩や歌は 世は數多くあるあれど  
完全無虧の汝等は 及ぶべきものあらんかし  
汝<sup>おの</sup>の生ける詩歌あり 他<sup>ひと</sup>皆死よし言葉のみ

シーキスピール氏ヘンリー第四世中の一段

一 旦 謀 叛 企 て 、 六 萬 人 の 將 と し て  
リ ナ ヤ ル ド 王 と 戰 ひ て 王 を 傳 よ あ し た れ ば  
自 由 立 て 王 と 成 り 四 方 よ 逆 威 を 震 ひ し も  
天 ひ い か で う 亂 臣 を 安 穏 よ て へ 置 く べ き や  
禍 亂 交 も 起 り 立 ち 戰 爭 止 む 時 更 よ あ く  
ウ エ ー ル ス 人 へ 蜂 起 セ り ス ユ ツ ト 人 へ 攻 め 入 れ り  
ペ ル セ オ ー ー 家 叛 逆 も 王 を 暗 殺 謀 る 者  
其 數 最 と も 多 か り さ 議 院 へ 権 理 打 ち 守 り  
王 は 烈 し く 抵 抗 す 財 政 最 と も 困 難 し  
王 へ 人 望 失 ひ て 健 康 漸 く 衰 へ て

其 晚 年 ふ 至 り て へ 心 で 心 責 め う れ て な そ と あ り ぬ 苦 し さ よ 其 有 様 を う つ し た る 廣 き 世 界 の 其 中 ふ ヘンリト 四 世 な ら さ る へ 今 最 と 下 賤 な る 我 人 の 今 し も 眠 る 其 數 へ あ 且 、 羨 し 羨 し 天 よ り 我 ふ 賦 は り て 如 何 な る 罪 の 崇 や 、 山 仙 士 枕 を 高 く 高 い び き 眠 の 人 神 よ 眠 り 神 伽 そ る と こ そ 云 ふ べ け れ 眠 の 神 よ 見 り あ さ れ

假 令 へ 暫 時 の 間 あ り 共 腹 の 苦 し さ 忘 れ た さ 膜 を 閉 ぢ て 眠 ら ん と そ も 如 何 あ れ ば 眠 神 く そ ぼ り か へ る 稿 の 床 飛 び く る 虫 の 羽 音 さ へ す や く 眠 む る も の あ る は 床 の 上 あ る 天 蓋 の 眠 を 誘 ふ 樂 の 音 へ 貢 人 高 位 の 寝 屋 ま で へ 實 よ 愚 あ る 神 が う し 不 潔 か 床 よ 横 た へ る 王 者 の 床 よ 来 う ぬ そ

此 一 篇 へ こ れ ぞ こ れ 安 眠 と て へ 片 時 を シエキスピーヤの名作ぞ 王 者 の 數 へ 多 い れ ど 幾 人 あ り や 聞 か ま ほ し

比べものよハあらぬのを  
ゆら／＼ゆる、帆柱の  
水夫の目をば閉ぢさして  
吹き来る嵐凄トく  
天地とゞろく浪音ハ  
下ハ無間の地獄かる  
浪ゆゆうめき眠らせる  
惣身水よひたされて  
斯く騒しき其折も  
草木も眠る牛三よ  
手を替へ品を替ゆるとも  
依怙最負ある神よこそ  
寝ろや眠れや、羨し  
苦しさものハ世あらト

そていぶかじき神の意ぞ  
高き上よも安く寝る  
情け用捨も荒浪や  
うぞ巻く浪を巻き上げて  
死人も覺むる程あるよ  
高き柱の其上  
神の力ぞ不思儀ある  
身を粉よ碎く水夫よハ  
眠の神ハ附き添ふよ  
王者の傍よ來らぬハ  
あゝ幸多き賤の身ハ  
熟思ひ合へば

シェークスピール氏ハムレット中の一段

尙今居士

あがらふべきか但し又  
爰が思案のしごころぞ  
これふ堪ふるが大丈夫り  
深き遺恨よ手向ふて  
どふも心ふ落ちぬる  
眠ると同じ眠る間へ

あらゆるうきめ打捨つる  
ア、しぬ、ねむる、ねむる時  
ハアこだわりげ有るやうぢや  
無常の風ふさろひれて  
いかある夢のきたるやら  
うき事長く忍ぶのも  
九寸五分さへ持ちたれば  
事をそまそもやそけれど  
強者の非道、世のろシリ  
想ふ美人の不深切  
貴人の無禮又たとひ  
軽しめらるゝ是を之れ  
重荷を負ひて汗流し  
暮せぬ暮し暮にのも  
死後の恐れがあるのぢや  
死後の恐れがあるのぢや  
死出の山路の不思議ある  
如何ある事のあるやうん  
たとひ此世よ止まりて

ハテ疑の晴れぬもの  
これが爲めかあ、あぜあれは  
万ヶ一ゆめみるあらば  
むせと曰ふよ死よ眠り  
此娑婆離れしまふとも  
其切先で一とつきふ  
之とぞ爲さぞ慎みて  
驕れる人のづかしめ  
緩み過ぎたる國の法  
いのよ善しとも下人の  
堪へ忍ぶの何故ぞ  
ういめつらい目こらへつ  
亦何故ぞ是のみを  
死出の山路の不思議ある  
如何ある事のあるやうん  
たとひ此世よ止まりて

うきかんかんを嘗るとも  
斯くと心よ思ふ故  
如何ある深き大望を  
實のあることぞあかりける  
ア、たをやか其風情  
わしが罪障わびてたべ

あの世の事へ恐しや  
たげき心も弱くあり  
花を開かば枯れ失せて  
左ハさりあぐうオヒリヤよ

そあたは神をいのるあら

シェーキスピール氏ハムレット中の一段

山仙士

死ぬるが増り生くるが増か  
つたあき運の情なく  
堪へ忍ぶが男兒ぞよ  
死んで眠りてそれざりと  
さらりと去つて消え行くも  
一眠りにてつもりこし  
萬の艱苦ろれぎりふ  
ろれよよされることあきを  
眠りて後ふ又や見ん  
死んで眠りの肉身を

思案をそるれこそのし  
うきめからきめ重かるも  
又もおもへばさりあらで  
露の玉の緒うちきりて  
うらきくるしき世の中を  
卑怯の業よあらぬうや  
去りて去りるものならば  
死ぬる眠ると云ふもの、  
夢の行末おぼつゝな

如何ある夢を見る事ぞ人の迷ふもことわりよ  
无情き世にあがむへて憂い目つらい目堪ふるを  
もとハ云へバのちの世の夢を恐るゝ故ぞうし  
人の非道や下そみや叶ひぬ戀の悲みや  
公事訟の承引や役入づらの權柄と  
堪へ忍あへ何故ぞ一本あれば何のその  
あたし命をあがくへて死もんとしても死み兼ねて  
うんをと云へん馬鹿へなし此世の憂目堪ふるも  
方角さへに誰知らぬ重荷を擔て汗みづく  
飛んて火よ入る夏虫の死もんとしでも死み兼ねて  
逢ふのがいやさ恐らしや十萬億土とへ云へそ  
居へたる胸も小ゆるぎし遂よはたさぞ水の泡  
もとを質せばこそかしり思ひ企つ大謀も  
くり言をるも益あしやおヘリヤ殿よ辨天よ  
祈て給へ我罪の臆病神あさそはれて

春夏秋冬

此詩ハ句尾ノ二字ヲ以テ二句づ、韻ヲ踏ミタルモノナリ例ヘバ「よろこさし暖かし」如シ

尙今居士

春夏  
春　　ハ物事よぬこせし　吹く風とても暖らし  
庭の櫻や桃のもすよに美しく見ゆるりあ  
野邊の雲雀へいと高く　雲井はるかよ舞ひて鳴く  
夏　　ハ木草の葉も茂る  
夕暮かけと飛ぶ蟲は　百日紅も咲きよけり  
人　　我が家を立てゝ　集まり來ある軒のさへ  
　　立出でゝ　すほ涼むらんさよふけて

秋　　ハ尾花ふをみなへし　桔梗の花も開くべし  
晴れ々雲あき青空ふ　照らひ月影明かふ  
されど何處も同トこと　寂しく見ゆる家の外  
冬　　ハ雪霜いと深く　冷ゆる手足を暖く  
風ハ吹き入る戸のあもい　近く團居をする時よ  
あさん爲とて爐火ふ　外の方見れば銀世界

我國ハ昔より言靈のさきハふ國といひ傳へて長きみどり  
き歌よ文ふ妙ある人も代々少くらむ然るを今の文明の  
御代はあたりて短歌よ名なる人の彼是きこゆきと長歌を  
よみ文のく人のをさくきこえざるハシとあやしや海外  
の國よてハ昔も今もうゑといへば長きをむねとして軍  
陣ふうたひ祭祀ようゑひ哀樂ふうたひく此道よ妙ある人  
代ゑゑえぞと云同し天地の間よ生るゝ人ハげふさもある  
代ゑゑえぞと云同し天地の間よ生るゝ人ハげふさもある  
るへき事ありらしかのき此比大學よ入て大人たちの西洋  
の詩を我が言葉ようつせるを見て感慨ふ堪へりいりでそ  
たれたるを起してゐる新代の風をうたひ出バやさく此  
道よ妙かる人の出來たらんふ實よことたまの幸ハふ國  
の手ふをも著くはた海外の人も聞つたへておどろ彼の言  
葉ようつきらん然うハ國の光ともあるへき事おうぞや

のくいふものは水屋主人幹文

正誤

尙今居士序二葉表五行 「シーキスピール」ハ「シェーキスピール」

ルノ  
誤

一葉裏一行  
〔嗟難〕八〔嗟歎〕ノ誤

十八葉表十三行 人ノ字ノ上ニ一船

二十一葉表十二行卑法、卑性、謬

二十五葉表九行  
甚少ナリハ甚

三十五葉裏一行  
四十葉表十三行「眠りの」ハ「眠りて」ノ誤

卷之三

四十葉表十三音 朝の「ハ」卯の「ト」く類

三十正葉寒一音 「子さべ」ハ「ひさべ」く類

二十正葉寒武音 「甚せナリ」ハ「甚せナシ」く類

二十一葉寒十二音草書「草書」く類

十八葉表十三音 人ノ字ノ土ニ「融」ノ字モ鏡丸

一葉寒一音 「融鑑」ハ「融鑑」く類

五種

明治十五年六月廿七日板權御願

同 同 年七月廿一日板權免許

定價金三拾五錢

年八月 出板

撰者

静岡縣士族

外山正一

牛込區津久戸前町廿八番地

東京府平民

矢田部良吉

福岡縣平民

井上哲次郎

麹町區富士見町四丁目拾壹番地  
麹町區三番町四十八番地

東京府平民

九家善七

日本橋通三丁目拾四番地



出板人

撰板者兼

撰者

撰者

出板